

専門科目の理解に必要な語彙指導のあり方の研究

— 保育者養成校としての取り組み —

Research on the State of Lexical Instruction Required for Understanding of
a Special Subject — As a Childcare Teacher Training School —

山 森 泉
中 島 賢 介
義 本 純 子

保育士養成校において学生が学ぶ科目のうち、授業理解に際して専門用語が多く用いられている「小児保健」の分野に着目し、今回、用語プリントを活用した授業実践を行った。その集計をもとに、現場の保育士がどの程度これらの専門用語を理解し、また必要と考えているかについての調査・比較を行った。その結果、用語プリントを活用することで学生の理解が促進されること、また、学生が学ぶべき語と現場保育士が実際に理解している語が必ずしも一致していないことの2点が明らかになった。

これらの結果を踏まえ、科目担当者は学生が当然理解しているであろうと思われる専門用語についても、充分な理解をもたない学生がいるということを前提に、適宜解説を加えたりテキストを吟味したりするなど、学習環境に十分配慮をしていかなければならない。今後も「日本語表現法」の指導を専門科目に応用しながら関わることで、より効果的な語彙指導が可能になることが予想される。

1. はじめに

文化庁が例年実施している「国語に関する世論調査」¹⁾や、日本漢字能力検定協会その他各機関から国語に関する調査結果²⁾が発表されたり報道されたりする度に、学生の語彙力(特に漢字力)の低下に関心が寄せられる。それらの調査結果では、大半の学生は漢字能力を身につけるべきだと考えていながら漢字の学習自体に対しては消極的であり、結果的に語彙力の低下を招いているとの指摘がされている。教育現場においても、語彙力の定着を図る様々な試みがなされているにも関わらず、語彙力は低下するばかりである。こうした影響は確実に高等教育機関にも押し寄せてきており、各大学や短大においても語彙力に関して次のような対策が求められている。

第一に、社会生活における語彙力強化の必要である。語彙力の低下は理解力や思考力の低下にも関連するため、各校とも補習授業などの試み(リメディアル教育)に取り組んでいる。2005年に日本リメディアル教育学会³⁾が発足した背景も、こうした事情と不可分である。社会人に必要とされる語彙力の向上を目指すといえども、その範囲が膨大かつ曖昧であるために授業形態・

学習方法は千差万別である。さらに、就職試験に際しても漢字・語彙・文章表現が求められることから、結果的には就職試験対策の一環として行われているケースもある。

次に、専門教育への導入段階における語彙力強化の必要である。「専門科目のテキストの文章が分からない」「テキスト本文で説明に用いられている語句の意味が分からない」という学生に対し、テキストに使用されている語について分かりやすく解説し、専門用語をスムーズに習得させていくためのものである。それは、専門職として理解すべき用語を習得するばかりでなく、現場において適切に使用できることを目的とした語彙指導である。専門科目の授業の初期段階において、用いられている言葉でつまづくことは、専門職としての就職に対する意欲や動機を失わせるだけではなく、学習効果の低下も招きかねない。前者の責務が一般教養として学部を問わず必要とされるリメディアル教育の領域であるとすれば、後者の責務は専門職を養成する機関（保育士であれば保育士養成校）の専門科目の領域であるといえる。

今回は後者の立場に立って、保育現場では実際どの程度の語彙力が要求され、どの程度理解しておかねばならないかという「現場（ゴール）からの視点」を考慮して授業実践に取り組んだ成果を報告する。

2. 実施の経緯

本学保育学科では、幼稚園教諭2種免許と保育士資格を取得するため、卒業に必要な単位は基礎科目18単位以上専門科目71単位以上、合計89単位以上と、専門科目中心のカリキュラムが組まれている。目的意識が明確で意欲的な学生が多い反面、時間割のゆとりがほとんどないため、「日本語表現法」の授業があっても、文章表現や漢字表記に関して時間をかけて学ぶことは容易ではない。その結果からか、学内教員だけでなく実習先の指導者からも、「誤字脱字が多い、文章が書けない」などの苦情が寄せられてきた。そこで推薦入試での入学者が多い現状に合わせ、学生に入学前の課題として「漢字検定」準2級、2級の問題集を学習させた後提出させてきた。また、授業内では、漢字の書き取りを試験範囲として出題するなどしてきたが、全体的に目に見える効果が上がらなかった。結局、これらの学習が全て一過性のもので、語彙が定着しなかったということである。

そこで、従来「実習指導」の授業時間内で単発的に実施してきた「保育に必要な語句」の読み書きテストや間違いやすい漢字・表現などの指導を、昨年度からは「日本語表現法」の授業内容に組み込んで行った。こうして、漢字表記に対する学生の意識を向上させるために継続して漢字表記の指導を行った結果、漢字に対する意識と能力が向上した。⁴⁾

しかし、その際に使用したテキストである『幼稚園教育要領』や『保育所保育指針』の用語は比較的平易で、一般生活においても出現率の高い字であった。それゆえ、専門性だけを問題にするならば、習得した漢字や語句の難易度は低いと言わざるを得ない。

そこで、今回筆者らは、使用される語句の難易度が高い科目であり、授業理解における専門性が高い「小児保健」の分野に着目した。テキストに使用されている用語はほとんどが医学用語で、一般に読字が困難なものが多い。授業内容も難易度が高く、再試験者が多い科目の一つである。おそらく、学生の多くはテキストに登場する用語が「読めない、意味が分からない」といった状

況ではないかと推測される。その一方で、果たして「これらの用語が現場に必要なのか」「必要とされるならば、どういう場面で必要なのか」といった疑問も生じる。

筆者らは、専門用語に関する語彙指導を模索する一方で、専門科目担当教員や現場保育士への調査を行うことで、効果的な授業のあり方について検討していきたいと考えている。本稿は、今年度新たに実施した用語プリントを活用した授業実践とそれに伴って実施した調査に関する報告である。

3. 授業実践

(1) プリント作成まで

対象科目の「小児保健実習」は、本学においては1年次前期履修科目である。高校を卒業したばかりの学生にとっては、授業で扱う内容や語句が子どもに限定している病名や症状であるとはいえ、大多数の語は初めて見聞きするものである。一般に医学用語には難解な語が多いこともあり、学生が理解するためにはハードルが高い科目である。しかし、科目担当者や他の教員から見れば、自分自身の生活体験も含めて知っている事柄も多いため、「学生の不勉強」で片付けがちな面がなかったとは言いきれない。学生の学力低下が叫ばれる昨今、語彙力・漢字力の実態を漠然とではなく限定した範囲で捉えておくことが必要であると考え、授業で使用しているテキスト内の語句に関して学生がどの程度読めて理解しているのかを調査することにした。

特定の科目(分野)に関してこのような語彙調査を行うのは、初めてのことである。ある程度授業が始まってからでないと入学した学生のレベルや取り組み姿勢が見えてこないため、どのように実施するか判断がしにくい。今回は授業開始3週目に、授業に対する感想を学生から聞いたところ、例年同様「難しい」との声が多々あった。そこで、科目担当者の了解のもと、進捗を確認しながら4回目の授業から試験前の最終回までの11回を対象として、毎時間の授業範囲のテキストに出ている語彙に関しての理解度調査を実施することにした。

手順は以下の通りである。毎回の授業時に合わせて次の①～⑤を行った。

- ①テキストから毎回の授業範囲となる本文中や表中の語句を選び出す。
- ②選んだ語句に、読みと簡単な意味を載せたプリント(A4一枚)を作成する。
(例 咳嗽: ガイソウ、せき。呈する: テイする、示す・あらわす。詳細は資料1参照。)
- ③授業開始時にプリントを配付する。
- ④学生がプリントの語句にA～Dの記号(後述)を付け、授業終了時に回収する。
- ⑤回収したプリントは、集計した後、次の授業時に返却する。

なお、プリントの配付、回収は学生のリーダー(6名)に依頼した。

上記④において学生が付ける記号は、次のようにA～Dの4つである。

- | |
|------------------------------------|
| A・・読みも意味も知っている。注釈不要 |
| B・・読みは知っているが、意味はあいまいだった。意味は知らなかった。 |
| C・・読みは知らなかったが、意味は大体わかる。 |
| D・・読みも意味も知らなかった。注釈必要。 |

1回目のプリント回収時に、このような語句プリントの継続配付があったほうがよいかどうか

を尋ねたところ、必要：58.1%、どちらでもよい：34.3%、不必要：1.0%、未記入：6.6%という結果であった。その際、「毎回集めるのではなく、配付だけにしてほしい」との記載をした学生もいた。これに対しては、次年度の授業改善に生かすために今年度初めて実施する実態調査であること、どの程度語句を理解しているか調べることが目的であることの2点を挙げて、毎時間の回収の必要を説明したところ、学生たちは納得して記入・回収に協力してくれた。

(2) 語句の選定

テキストから語句を選ぶ際には、読み・意味の両方を確認するため、ルビつきの語も含めた。声に出して読むことが少ない現状を考え、読めないかもしれないと思われる語をかなり含めてある。当然のことながら、医学系の語句が多い。しかし、プリントに載せた語句が難読語・難解語ばかりであると、一語一語の確認をしないまますべて「D」としがちな学生もいる。そこで、幾分平易な語（偏食、外傷など）も適宜混ぜた。

また、配付・回収の手間を考え、毎回A4用紙1枚に収まるように語句を精選した。そのため、回によっては難解と思われる語句であっても漏れたものもある一方で、病名などの難解な語句が少なく、記述全体に平易な語句が多い部分もあった。その際には、以前調査した語句を再度取り上げ、授業やプリントで触れたことによる定着度を見ることにした。（該当語句は12語）

実践対象とした授業11回分で、プリントに取り上げた語句の総数は241語、重複した12語を除くと実質229語である。内容的には、

ア：病名・症状・体の部位を示す語（咳嗽、猩紅熱、臀部など）と、

イ：使用頻度が低く、学生にはなじみがないと思われる語（漸増、顆粒、叩打など）

の二つに大別できる。

(3) 実際のプリントとデータ

次ページに、資料1. 実際のプリント（1回目）を示す。このプリントを語句ごとに集計し、学生の理解状況の差異を把握するために、各語についてグラフ化を行った。（グラフ1a・グラフ1b参照。）

プリント1の語句を集計した後述のグラフ1b（分かる順）では、60%前後の学生が「読みも意味も分かる」語句と、30%を切る語句とに分かれる傾向がはっきりと出ている。このような差は、各回ごとの集計グラフでも顕著に見られた。

資料1. 語句のプリント(1回目)(実際の大きさはA4版)

小児保健実習 用語確認プリント1 (テキスト準拠版)

■121 ページ 下線付きの読みは医学用語としての読み方

- ・粘液 (ねんえき) : ねばり気のある液
- ・防御 (ぼうぎょ) : 相手の攻撃を防ぎ守る
- ・膿 (うみ) : 化膿した傷口から出る黄白色の粘液
- ・顆粒 (かりゅう) : 小さく丸い粒
- ・腹部膨満 (ふくぶぼうまん) : おなかが張る
- ・咳嗽 (がいそう) : せき。「嗽」も「せき」の意味
- ・電解質 (でんかいしつ) : 水などの溶媒に溶け、電離してイオンなどを生じる物質
- ・湯冷まし (ゆざまし) : 冷めてぬるくなった湯
- ・頻回 (ひんかい) : 回数が多い
- ・浸す (ひたす) : ぬらす。しめらす
- ・臀部 (でんぶ) : おしり。しりのあたり
- ・与薬 (よやく) : 薬を与えること

■122 ページ

- ・排便中枢 (はいべんちゅうすう) : 排便を調節するところ
- ・肛門括約筋 (こうもんかつやくきん) : 肛門の周囲にある環状の筋肉。拡大収縮作用により内容物を押し出す。
- ・兔糞 (とふん) : ウサギの糞のようにコロコロとした便
- ・嘔吐 (おうと) : 食べたものや胃液を吐くこと
- ・摂取 (せっしゅ) : 飲食物などを取り入れる
- ・脱肛 (だっこう) : 直腸の下端の粘膜が肛門の外に出ること
- ・蔗糖 (しょとう、しゃとう) : サトウキビから作った甘みの強い結晶。砂糖

■このほかに読みや説明が必要な語句があったら書いてください。

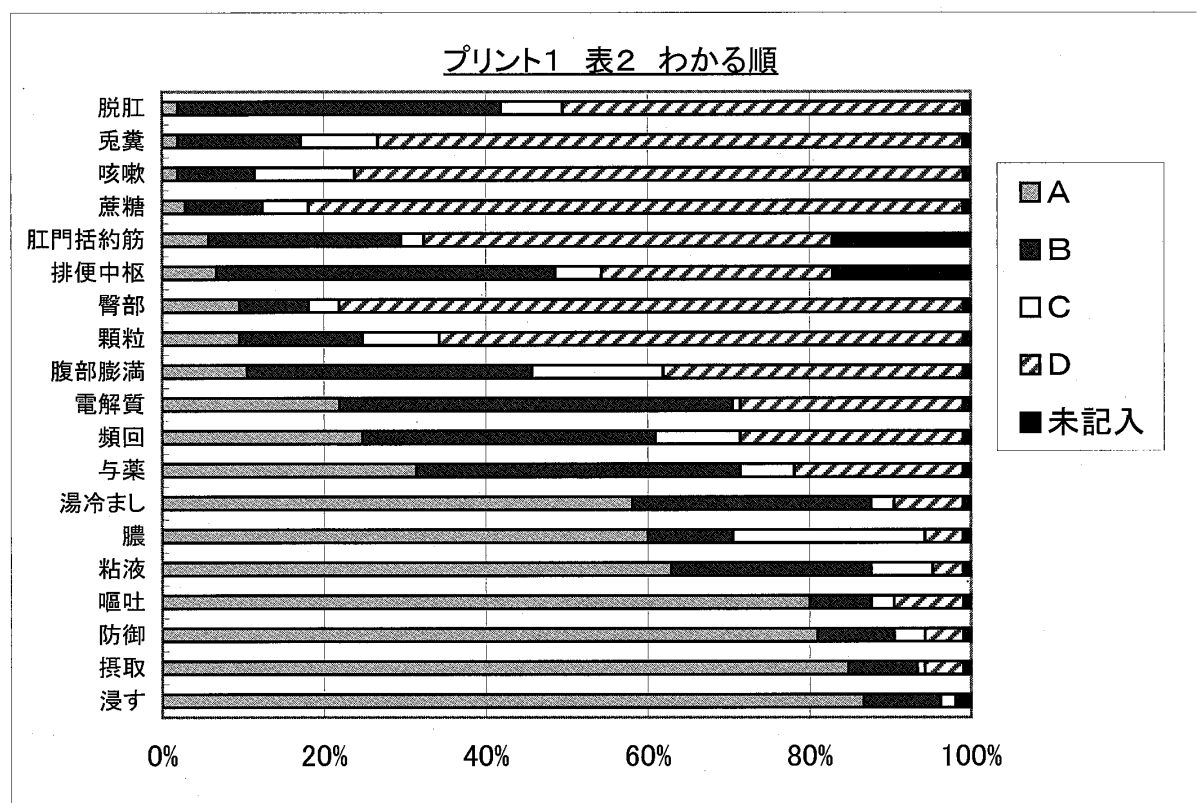
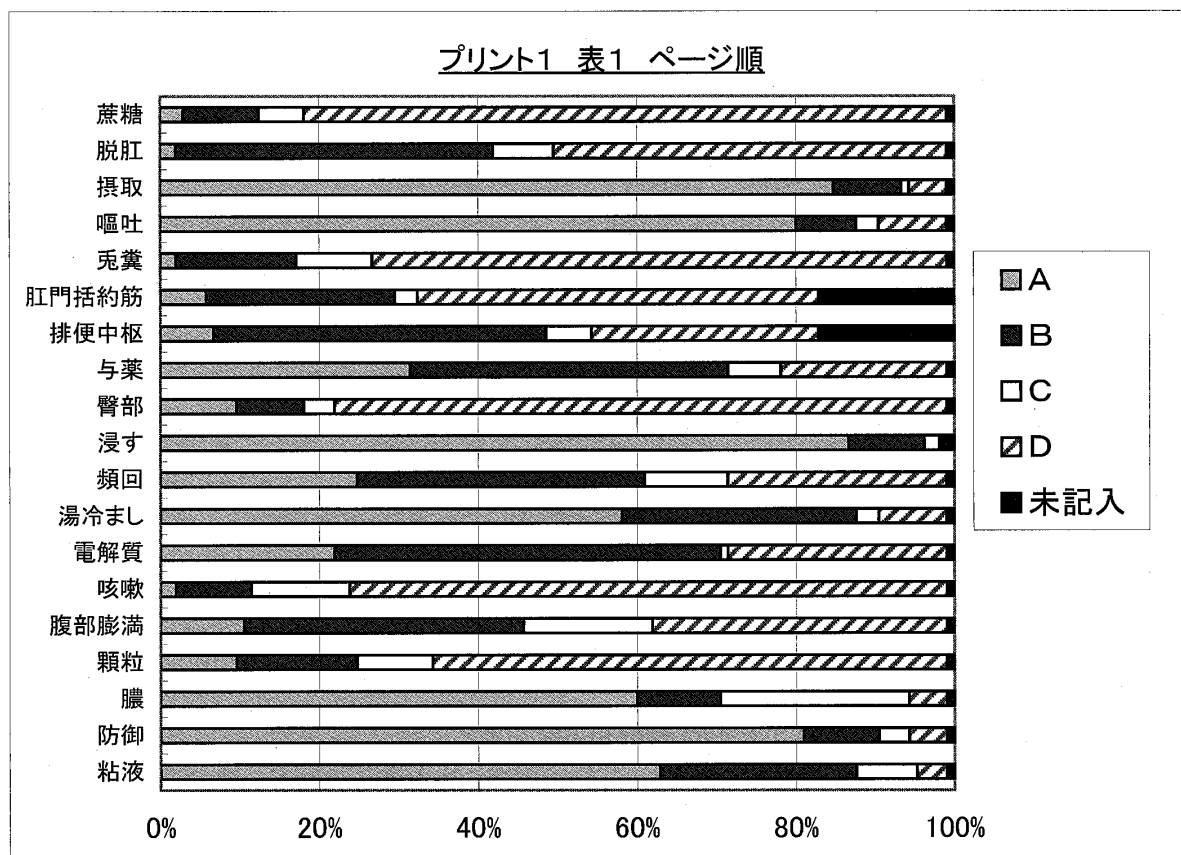
今後の参考に一度回収します。

語句の頭の「・」の前に、次の印をつけてください。

- A・・・読みも意味も知っている。注釈不要。
- B・・・読みは知っているが、意味はあいまいだった。意味は知らなかった。
- C・・・読みは知らなかったが、意味は大体わかる。
- D・・・読みも意味も知らなかった。注釈必要。

番号	名前
今後このようなプリントが必要かどうか (必要 どちらでも 不必要)	

グラフ1 a・1 b



4. 結果

毎回の授業終了後に回収したプリントについて、語句ごとに記号A～Dの数を集計し、最終的には一覧表にまとめた。さらに、「D」とした学生が多い順に調査語句を並べ替えたところ、約3分の1の語句は、半数以上の学生が「意味も読みもわからない」とした医学用語を中心とする語であることが明らかになった。(グラフ2参照)

(1) 読みも意味も分からない語

初めて接する用語であれば意味が分からないのは当然であるが、読みが分からなければ、説明を聞き漏らした場合や授業での扱いが省略された場合などは調べようがない。また、医学用語以外の語句として取り上げた語(漸増、顆粒、叩打など)については、学生だから知らないのかどうかの確認も必要である。テキスト編纂者や科目担当者の語彙にあっても若い世代になじみがない語句の場合は、その傾向がより強いと思われる。

漢字は表意文字であるから、読めなくても意味が何となく分かるものも多い。約40%の学生が「B: 読めるが意味は曖昧だ」とした語句のうち、「中枢神経」「乳幼児突然死症候群」「予後」などの医学的

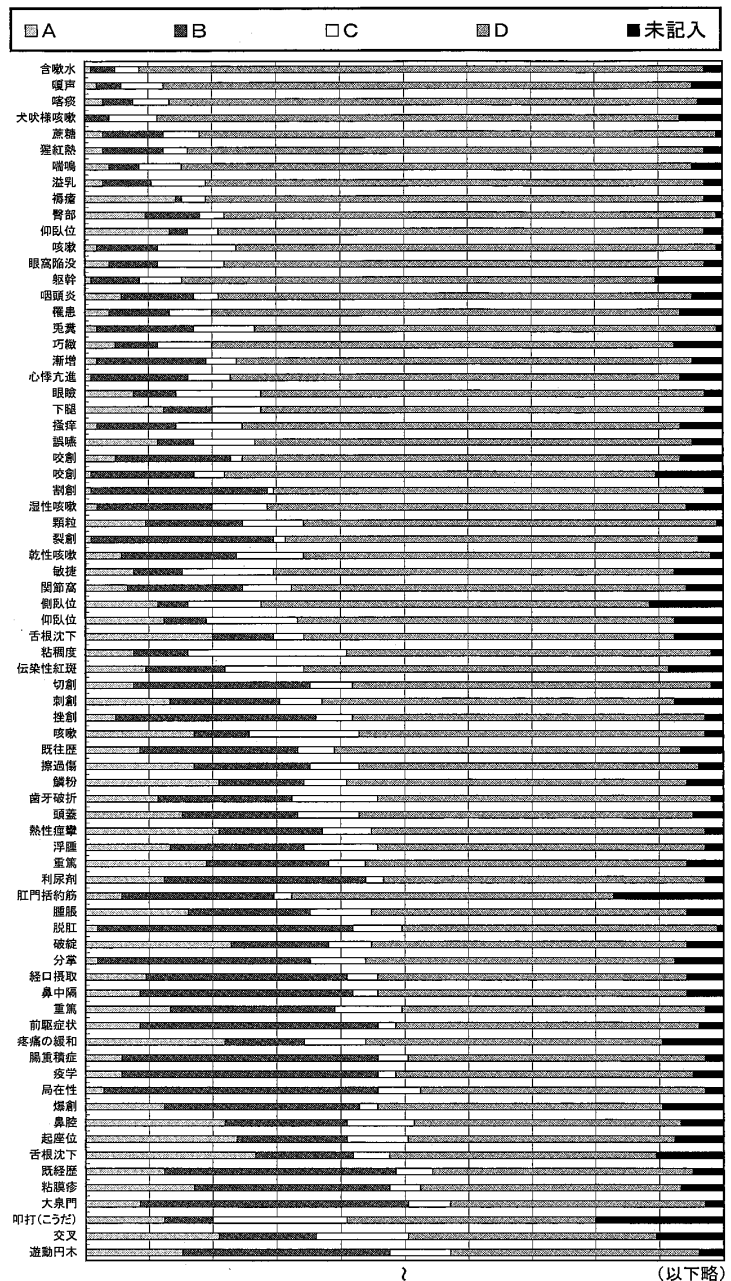
用語については、授業時の説明で対応が可能である。その一方で、半数以上の学生が「B」とした語句の中には、「故意」「呈する」「分掌」など、一般的に使用する語も含まれている。

このような語については語彙力の個人差も大きい上、逐一授業内で説明しては肝心の授業の展開に支障をきたすことになる。したがって、これらは専門科目の授業以前に、「日本語表現法」段階の指導で対応を図らねばならない語句であると考えられる。

(2) 2回調査した語句の理解度変化

前述したように、プリントのスペースが空いた際、理解度定着の効果を見るために再度調査し

グラフ2: D (読みも意味も分からない) の多い順



た語句が全部で12語ある。全体的には2回目に上昇傾向が認められる(表1:※1、※2、※4の語)。しかし、未記入(記入漏れ)の学生が1回目と2回目で変動した影響も考えられる。また、再調査した日までの間隔が長く空いたことなどによって、一部理解度の伸びが低調な語句(※3)などもある。全語句の結果を示したのが表2である。

表1: 2回調査した語句の理解の変化 太字、下線付き: 最多層

		A	B	C	D	未記入
※1 腹部膨満	1回目	10.4%	<u>35.2%</u>	16.2%	37.1%	1.0%
	2回目	<u>41.0%</u>	24.8%	7.6%	22.9%	3.8%
※2 与薬	1回目	31.4%	<u>40.0%</u>	6.7%	21.0%	0.9%
	2回目	<u>55.2%</u>	22.9%	7.6%	10.5%	3.8%
※3 仰臥位	1回目	13.3%	2.9%	4.8%	<u>76.2%</u>	2.9%
	2回目	12.4%	6.7%	14.3%	<u>59.0%</u>	7.6%
※4 嘔吐	1回目	<u>80.0%</u>	7.6%	2.9%	8.6%	0.9%
	2回目	<u>92.4%</u>	0.9%	2.9%	0.9%	2.9%

表2: 2回調査した全語句

授業内での説明に加え、プリントでも実際目にしたことによって記憶に残ったこともあり、2回目は漢字の読み・意味の認識が向上したことがデータ上裏付けられる。1回目の調査の該当ページでは授業でほとんど触れていない表中の語句であっても、「読める・読めない」の確認をすることで一度は目になることから、2回目には読めるようになる学生がいる。授業で十分に説明したような語句(※4)であればかなり向上が見られる。

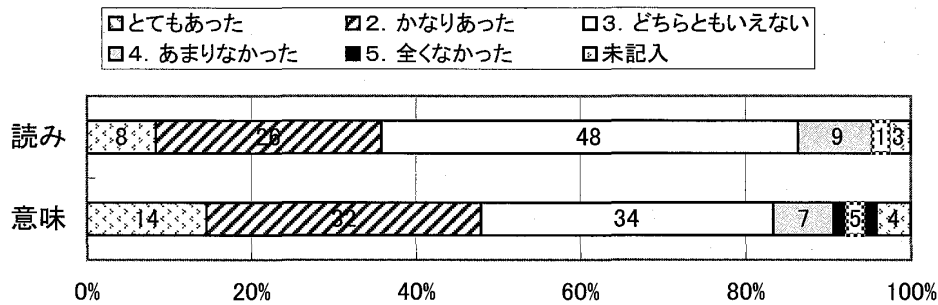
プリント番号	出題順		A	B	C	D	未記入
1	2	防御	85	10	4	5	1
2	17	防御	80	9	2	10	4
1	5	腹部膨満	11	37	17	39	1
2	11	腹部膨満	43	26	8	24	4
11	6	膨満	50	21	3	18	13
1	6	咳嗽	2	10	13	79	1
2	12	咳嗽	18	9	18	57	3
1	9	頻回	26	38	11	29	1
2	28	頻回	52	24	4	18	7
1	12	与薬	33	42	7	22	1
2	14	与薬	58	24	8	11	4
1	16	嘔吐	84	8	3	9	1
2	1	嘔吐	97	1	3	1	3
4	4	重篤	14	27	11	50	3
10	14	重篤	20	20	6	53	6
4	23	仰臥位	14	3	5	80	3
8	5	仰臥位	13	7	15	62	8
5	6	溺死	75	3	10	9	8
8	10	溺者	51	10	6	28	10
5	15	熱傷	68	21	2	5	9
9	18	熱傷	86	6	0	7	6
8	17	咬創	1	17	5	71	11
10	1	咬創	5	19	2	72	7
10	4	咬む	63	7	14	15	6
8	8	舌根沈下	21	10	5	61	8
11	1	舌根沈下	28	16	6	44	11

5. 実践の成果

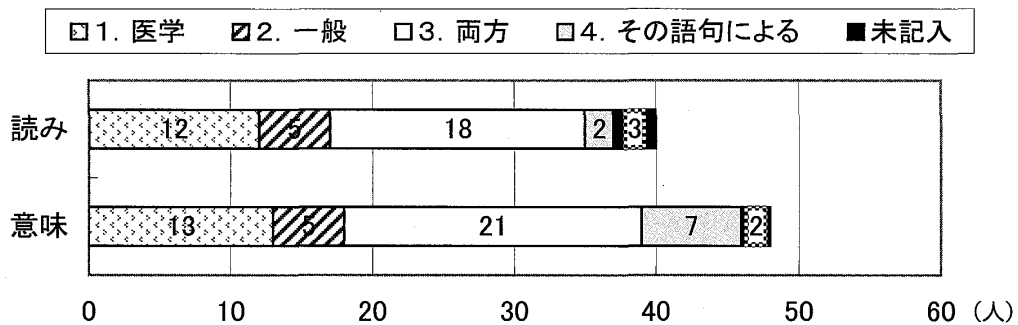
(1) 授業終了時のアンケートより

授業最終回に行った授業理解へのプリントの効果を問うアンケート⁵⁾では、次のような結果となった。

グラフ3：授業理解の効果（グラフ内数字は人数）



グラフ4：何が役に立ったか



グラフ3は、①「語句の読みは授業理解に効果がありましたか」、③「語句の意味は授業理解に効果がありましたか」に対する結果である。

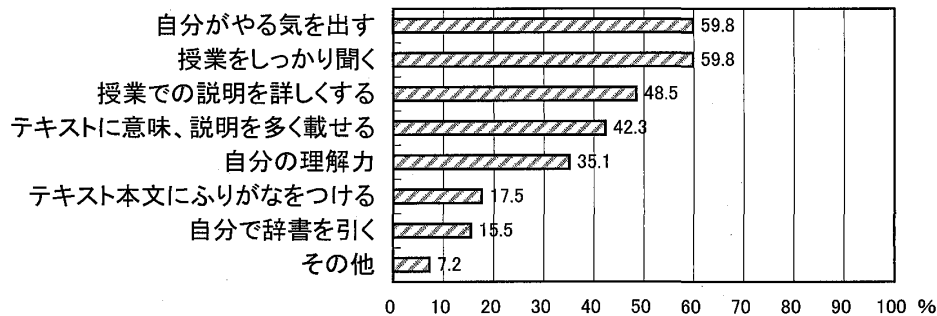
質問項目の①「語句の読みの効果」③「語句の意味の効果」を問う質問では、「どちらともいえない」が最多層であったが、否定的な回答者はそれぞれ10.5%、12.6%と少数であった。

次に、①③の質問で「1. とてもあった」「2. かなりあった」と答えた者を対象とした質問②④は、ともに「医学用語と一般用語のどちらが役立ちましたか」に対する回答である。「1・2と答えた人」を対象としているのにもかかわらず、「3. どちらともいえない」に○を付けた学生もいる。このうち②④に答えた者が、②では9人、④では2人いた。

「効果があったのはどのような用語か」（グラフ4参照）については、単純比較では医学用語の方が多いいものの、「両方とも」という回答はるかに上回っている。取り上げた語全体に占める医学用語の割合が大きいことを考えると、数値以上に一般用語についても役立っていたと言える。

このアンケートにおいて、⑥「授業理解に必要なものは何だと思いますか」の質問(複数回答可)に対し、59.8%の学生が「自分自身のやる気」「授業をしっかり聞く」を挙げている。(グラフ5参照) いずれも、授業に臨む学生自身の姿勢を問題にしている。自分以外にその要因を求める「授業での説明を詳しく」や「テキストの説明・意味を詳しく」は3番目4番目になっている。

グラフ5：授業理解に必要なもの(複数回答)



このように学生が自ら学ぶ姿勢を重要と考えているのであるならば、授業を担当する側は、なおさら授業に取り組みやすい環境を整えていく必要がある。具体的には、今回の調査で得られたデータを元に、学生が理解しにくい語句に関して、より意識的な説明を行う、必要に応じて補足プリントを作成する、読みが分かるプリントなどを別に作成するなどが考えられよう。

語句の読みが「とても・かなり役立った」と答えた学生は、授業理解に必要なものとして「テキストの意味・説明」「テキストに振り仮名」と答える比率が高く、「授業説明を詳しく」という授業をする側への依存傾向は低い。「授業説明をしっかり聞く」の比率も高いことから、ある面で授業担当者に頼らず、自学自習するタイプの学生であるとも言えよう。

一方、「あまり・全くなかった」と答えた学生は、「授業説明を詳しく」「授業をしっかり聞く」「自分のやる気」と答えており、テキストへの依存度が低い傾向にある。

語句の意味と授業理解に関しても、読みのプリントの場合とほぼ同様の傾向が見て取れる。ただし、読みのプリントで「とてもあった」と答えた学生は、「授業をしっかり聞く」の比率が高くなかったが、語句の意味に関しては71.4%と最多層となっている点に違いが見られた。

専門科目の理解に必要な語彙指導のあり方の研究

表3：授業理解と語句の読み クロス集計表

		授 業 理 解									
	上段 度数 下段 %	合計	テキストに 振り仮名	テキスト 意味説明 を詳しく	辞書を 引く	授業説明 を詳しく	自分の やる気	自分の 理解力	授業を しっかり 聞く	その他	未記入
語 句 の 読 み	合計	95	17	40	14	49	58	33	57	5	3
		100.0	17.9	42.1	14.7	51.6	61.1	34.7	60.0	5.3	3.2
	とてもあった	8	2	5	2	2	4	3	3	1	0
		100.0	25.0	62.5	25.0	25.0	50.0	37.5	37.5	12.5	—
	かなりあった	27	6	12	5	13	16	12	18	0	1
		100.0	22.2	44.4	18.5	48.1	59.3	44.4	66.7	—	3.7
	どちらとも いえない	48	8	19	5	27	30	16	29	4	1
		100.0	16.7	39.6	10.4	56.3	62.5	33.3	60.4	8.3	2.7
	あまりなかった	8	1	2	2	5	6	1	6	0	0
		100.0	12.5	25.0	25.0	62.5	75.0	12.5	75.0	—	—
	全くなかった	1	0	1	0	1	1	0	0	0	0
		100.0	—	100.0	—	100.0	100.0	—	—	—	—
	未記入	3	0	1	0	1	1	1	1	0	1
		100.0	—	33.3	—	33.3	33.3	33.3	33.3	—	33.3

表4：授業理解と語句の意味 クロス集計表

		授 業 理 解									
	上段 度数 下段 %	合計	テキストに 振り仮名	テキスト 意味説明 を詳しく	辞書を 引く	授業説明 を詳しく	自分の やる気	自分の 理解力	授業を しっかり 聞く	その他	未記入
語 句 の 意 味	合計	94	17	40	14	48	57	32	56	5	3
		100.0	18.1	42.6	14.9	51.1	60.6	34.0	59.6	5.3	3.2
	とてもあった	14	3	8	4	4	8	6	10	2	0
		100.0	21.4	57.1	28.6	28.6	57.1	42.9	71.4	14.3	—
	かなりあった	32	8	14	4	17	20	10	20	1	0
		100.0	25.0	43.8	12.5	53.1	62.5	31.3	62.5	3.1	—
	どちらとも いえない	34	5	14	4	18	20	13	18	2	2
		100.0	14.7	41.2	11.8	52.8	58.8	38.2	52.9	5.9	5.9
	あまりなかった	6	1	1	2	4	4	0	4	0	0
		100.0	16.7	16.7	33.3	66.7	66.7	—	66.7	—	—
	全くなかった	5	0	2	0	4	4	1	3	0	0
		100.0	—	40.0	—	80.0	80.0	20.0	60.0	—	—
	未記入	3	0	1	0	1	1	2	1	0	1
		100.0	—	33.3	—	33.3	33.3	66.7	33.3	—	33.3

このような読みや意味のプリント作成を過保護と捉える考え方もあるだろう。学生の回答の中にも授業理解に必要なことは「辞書を引く」と考えている学生もいるが、本来はそれが望ましいことである。しかし、読み方もわからない語を辞書で引くといっても、医学用語に関しては難解な語句が多く、一般の国語辞典の類では調べようがない。さらに、医学用語の読み方には一通りではないものもあり、医学・看護学生たちもその点で苦戦している。実際に看護・医学生を対象とした読みに関する小辞典やハンドブックが出版されたり、専用のホームページが作られたりしている⁶⁾。また、医学分野で独特な読みの語句（例：口腔は医学ではコウクウ、一般にはコ

ウコウ) の場合には、一般の辞書では調べきれないという現状もある。

大切なのは、最終ゴールが「読めること」ではなく、その語句が何(どういう状態や症状)を意味しているのかを理解することであり、覚えることではないという点である。また、保育を専攻する学生にとってほとんどの語句は書く必要性は低い。その意味において、授業理解の土台とも言えるべき部分をサポートすることで、学生の授業参加意欲が高まり、ひいては理解度向上(成績向上)につながるとすれば、このような指導のあり方を検討してもよいのではないだろうか。

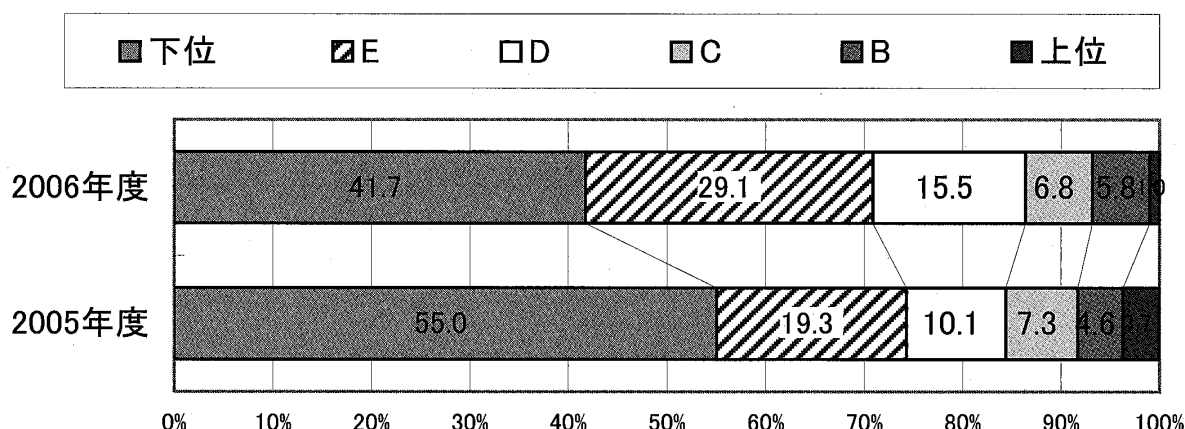
(2) 単位認定試験成績(過年度と比較して)

例年、単位認定試験での「小児保健実習」の再試者は多い。昨年度は36.6%の学生が再試を受けた。試験傾向は今年度も同様であり難易度も変わらないが、再試該当者は22.3%と大幅に減った。今年の学生が昨年度の学生に比べてレベルアップしているわけではない。『保育所保育指針』・『幼稚園教育要領』を対象として実施している「日本語表現法」での漢字テストの成績は、昨年に比べるとやや低めである。にもかかわらず、この試験において再試者が減ったのは、毎時間のプリント記入による語彙確認の効果や、科目担当者の工夫によるところではないかと推察できる。

最終成績の得点分布割合を示したのが、グラフ6である。今年度の得点分布を見ると上位者はいないが、全体として底上げされている。この点において、少なくとも授業実践の成果があったといえるのではないだろうか。

前年度の実践を通して、学生は、難度が高くても必要性を実感した漢字(哺乳瓶など)を正しく読み書きできることが実証されている⁷⁾。その延長としての今回の実践は、書くことは最初から要求していないため同一の基準で捉えることはできないが、目標を絞った漢字指導(読み方サポート)という点(第一段階)において一定の成果を見ることができたといえる。

グラフ6：単位認定試験成績 年度別比較



6. 現職保育士へのアンケート

(1) アンケート実施の経緯・方法

今回の実践で得られたデータをもとに、今後科目担当者と改善に向けての検討を行っていくが、昨今の教育のあり方や言葉の理解に関する様々な情報などから判断すると、学生が若いから知らないと片付けるだけでよいのかという疑問も残る。一方で次のようなことも考えられるのではないだろうか。「学生はこんなことも知らない」と専門科目の科目担当者が思っている対象語句・用語は、現場の大多数の保育士にとって既知のことであり、理解している語句であると判断できるのだろうか。医学（医療）専門家にとっては自明の語であり学生への理解を必須と考えている語句であっても、一般の人々にはなじまない用語であることも検討してみる必要がある。

そこで、学生が「読めない・分からない」とした順に総語数を並べ替えて、241語の約1／3（73語）について検討し、保育現場で必要ではないかと科目担当者が判断した語を中心に25語を選び、現職保育士と学生の理解度とを比較することにした。選んだ語の中には、医学・看護系の語句ではないが、テキスト本文にルビなしで出ている一般の語句（漸増、分掌など）も含めた。

調査対象は、本学の学生の実習を依頼している保育所を中心に金沢市内25箇所の保育所に勤務する保育士である。調査用紙を郵送して調査協力を依頼し、自記式で園ごとに一括して返送してもらった。アンケートは無記名であり、園名の記入も求めている。郵送依頼期間は8月14日～8月24日。幅広い年代分布になるように1園あたり10名の回答を依頼した。回答総数は245、そのうち、有効回答数は236である。（なお、今回の比較対象には含めていないが、最終的には82園785人から、同様のアンケートを回収している。）⁸⁾

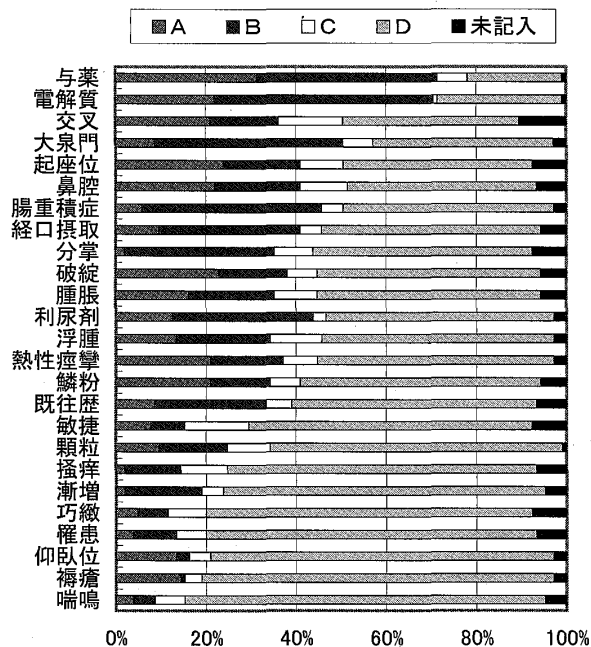
表5 アンケート回答者の属性

年代構成	人数	割合	保育経験	人数	割合
25歳未満	69人	29.1%	5年未満	74人	31.2%
25～29歳	51人	21.5%	5～9年	62人	26.2%
30～39歳	48人	20.3%	10～14年	34人	14.3%
40～49歳	40人	16.9%	15～19年	25人	10.5%
50～59歳	27人	11.4%	20～24年	14人	5.9%
60歳～	1人	0.4%	25～29年	15人	6.3%
			30～34年	6人	2.5%
			35年～	1人	0.4%

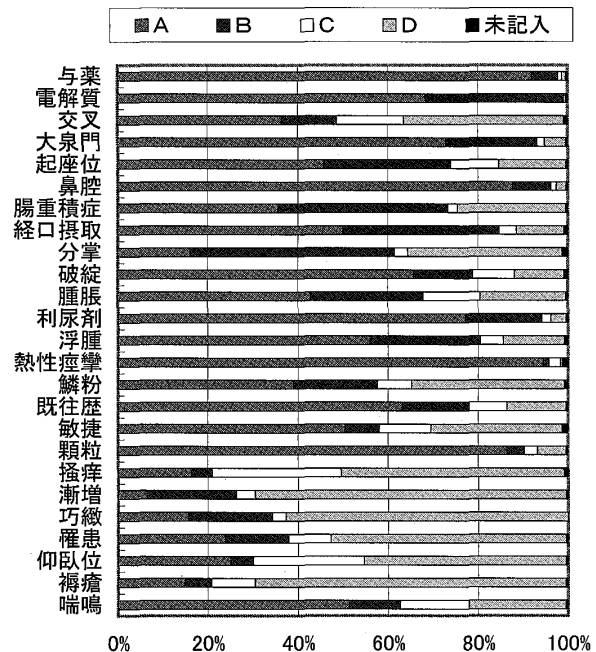
(2) アンケート結果

グラフ7・グラフ8が比較対象の語句に関する資料である。

グラフ7：学生の語彙



グラフ8：保育士の語彙



この調査によって、次のような傾向が浮かび上がってきた。

① 学生と保育士の差が大きかった語。(学生は知らないが、保育士は知っている語。)

差が大きかった語は下記の12語であるが、保育士が挙げた「知っておくべき語」との重複も当然多い。これらの語句のうち「顆粒、敏捷、破綻」などは一般に使用される語であり、保育現場での経験で身につけた医学用語も含めて「言葉に対する経験値」の差と考えられる。

顆粒、敏捷、既往歴、熱性痙攣、浮腫、利尿剤、破綻、経口摂取、鼻腔、大泉門、電解質、与薬

② 学生も保育士も知らない語。

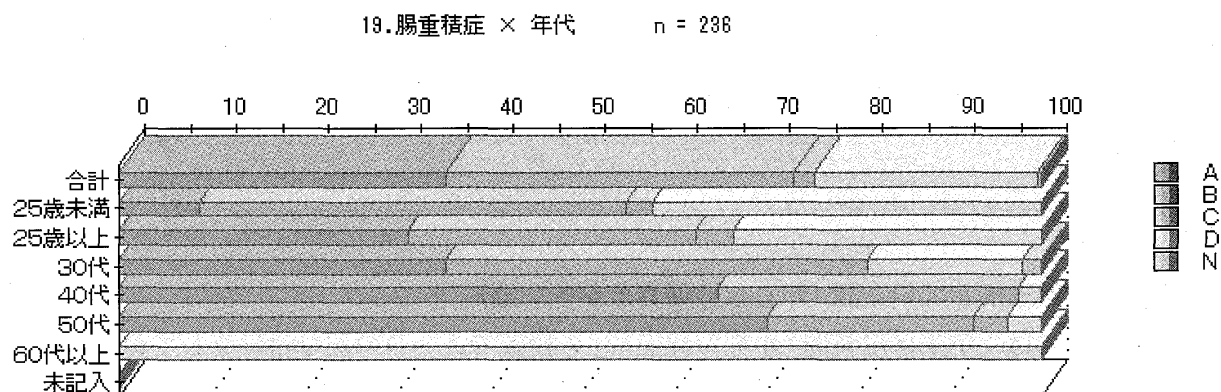
「褥創、仰臥位、罹患、巧緻、漸増、搔痒、分掌」の7語で、一般の用語でも使用頻度が低い語である。漢字検定で言えば2級から準1級レベルに相当する語もあり、わからなくても止むを得ないと考えられる語もある。しかし、組織に所属していれば使用する語彙である「分掌」は、6割以上が「読めるにもかかわらず意味が分からない」との回答だった。職種による使用差が現れている語句であり、幼稚園教諭対象の調査では違った数字になる可能性もあろう。

③ 年代による差

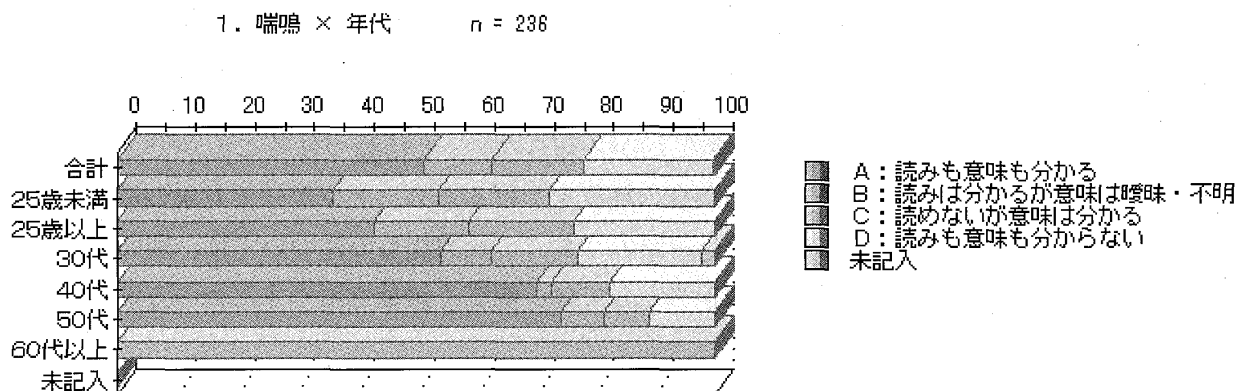
「交叉」の「叉」は常用漢字外(準1級レベル)の漢字であるが、意味は「交差」と同じであることから、年長者には「読み・意味ともに分かる」との回答が多かった。また「腸重積症」は後述する「知っておいてほしい語句」の中でも割合が高い語である。この語を年齢別に見ると、25歳未満が「読み・意味が分かる」の割合が極端に低い。以後、年代が上がるごとに読み・意味ともに理

解度が上昇している。「喘鳴」も同様の傾向である。(グラフ9、10 参照) 保育経験年数が長ければ必然的にこのような症状の子どもに接する機会も多くなるからであろう。「仰臥位」は、全体的に読める割合が低い。

グラフ9



グラフ10

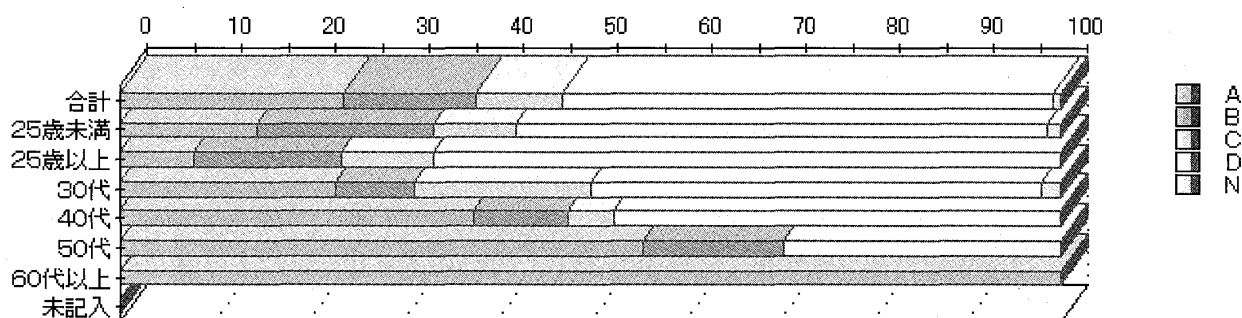


④ 年代による落ち込みが見られた語

若い世代ほど言葉を知らない傾向にあるが、中には、25歳未満よりも25歳～29歳の方が「読めて意味が分かる」割合が下がっているものがある。この傾向が見られるのは、「褥創、仰臥位、罹患、巧緻、漸増、搔痒、腫脹、起座位、電解質」の9語である。(グラフ11 参照) 学校という教育の場から離れてしばらく経つことで、日常的に使用しない語であれば落ち込みも当然であり、「漢字能力調査」における社会人の傾向と一致する。

グラフ 11

4. 罹患 × 年代 n = 238



⑤ 学生の方が理解している語 (知らない保育士が多い語)

今回の調査では、学生は毎時間「小児保健実習」の授業でA～Dの記号付けをしており、また、毎回の授業はシラバスに沿って単元単位で進められている。したがって、授業での関連項目もあり、調査語句は一つ一つ聞いているものの、全体としては文脈内での理解をしていることが多い。一方、保育士へのアンケートは「小児保健分野である」ことの添え書きはしたが、一度に多単元の語句をバラバラに問う形になったため、理解が容易ではなかったことが考えられる。その点で言えば、授業効果、プリント効果、文脈内での理解、単元学習における類推という面を割り引いておく必要がある。

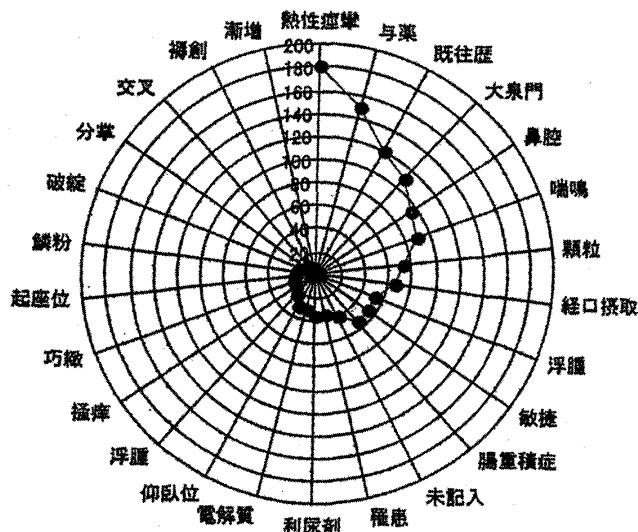
以上、指摘した①～⑤については、「学生だから知らない」と結論づけることができない語句が多数を占めていることがわかる。この調査の精度を上げるため、アンケート対象の保育士を拡大して行った⁹⁾。保育士も学生も知らない用語のうち、一般的なものについては、別の語に置き換えて説明すると同時に、日本語表現法担当としては、幅広く語彙を増やすための方策も検討しなければならない。

(3) 現場に出る学生に知っていてほしいと

考えている語 (多い順)

語彙理解のアンケート語句に関して、「現場に出る学生に知っておいてほしい語」を選んで印を付けてもらった。(数の制限はしていない。)(右のグラフ参照)

その回答の中で、5割以上の保育士が挙げている語句は、「熱性痙攣、与薬、既往歴」である。4割以上の語は、大泉門、鼻腔と続き、ほとんどの学生が読めず意味も分からない「喘鳴」は38.7%であった。これらの語句については、現場に出て経験を積むことで身に付く語でもあるが、2年次履修



の講義科目「小児保健Ⅰ、Ⅱ」段階でかなり理解を深めていくと思われる。

7. 考察 今後の課題と展望

以上のデータから、学生が学ぶべき語と現職保育士が理解している語が必ずしも一致しないということが分かった。例えば「保育士が医療機関に症状や部位を伝達する際に必要」であり、「医療機関から症状や部位の説明を受ける際に必要」な語であると科目担当者が、考えて、学生に習得してほしいという願いは理解できる。しかし、実際、保育現場での理解・使用度が低い語が存在する以上、それらの用語を必要最低限習得しなければならないかといえ、必ずしもそうとは言いきれない。医療機関においても、説明責任が発生した場合は専門用語をできるだけ排除し、患者に対し、分かりやすく理解を得やすい言葉で説明する義務があるだろう。それと同様に、保育現場では用語そのものを使わなくても、症状や部位などの説明ができればそれほど深刻な事態に陥ることはない。むしろ、昨今問題視されている子ども特有の症状などについて重点的に学ぶ方が、学習効果が期待できると思われる。

学生に行った調査を通して、読みや意味を確認するという基本的な作業を毎時間行うことで、専門用語に対する抵抗が多少なりとも緩和され、その結果、成績面での向上が今回確認できた。科目担当者によれば、授業の進め方そのものはほぼ例年通りであるが、昨年までに比べて今年の学生は質問が多く出るようになってきた。その質問に答えることで、意図したわけではないが授業説明が丁寧になっていたとのことである。これらを合わせ考えると、特定の科目に限らず指導者側に求められることは、学習者が読字困難な用語で学習そのものにつまずきを覚えることがないよう、環境設定を心がけなければならないということである。すなわち、用語が分かりやすくかつ学生の知識として確実に蓄積されるよう、教材を含めて十分に配慮していくべきである。

その方法として、考えられることは2点ある。

まずは、大半の学生にとって「意味が曖昧・不明だ」とされた用語については、必ず授業で分かりやすく説明することである。それが不十分であれば、当然学生の学習意欲にも影響が出てくるであろう。だが、徒に説明を重ねることだけに時間を費やすことも避けなければならない。

そこで、次に大切なことは、用語そのものの意味について説明する時間を短縮するために、教材(テキストや補足プリントなど)を工夫することである。同種のテキストを比較した際に、難解な語句でありながら意味も説明も載せていないテキストが見受けられた。¹⁰⁾ このことは、科目担当者が用語について必ず説明をすると考えているか、あるいは学生が記載されている用語を理解していることを前提として記述されているのであろうが、これらの前提条件が満たされていない場合は、指導者側が歩み寄らなければならない。専門用語を列記したり、漢字表記を多用したりという文面は格調高いものに見えるが、学習主体者である学生にすれば厄介な文面であることを執筆者は認識しなければならない。

今回は、専門用語をどのように設定し、どう学習させるかという点まで踏み込んだ考察には至らなかった。今後は、学生の語彙力向上のために、分かりやすい説明を前提とした学習方法を確立させていく必要がある。そのためにも、今後も専門職の立場(保育現場)に立脚した学習を通して学生に学習意欲を喚起させていくと同時に、「日本語表現法」が専門科目とより密接に関わ

りながら、指導者と学生との媒介になるよう努めていかなければならないと考える。

註・引用文献

- 1) 国語施策の参考とするため、平成7年度から文化庁が毎年行っている調査で、年代別の統計分析も行われている。平成17年度「国語に関する世論調査」では、敬語に関する意識のほか、例年行われている慣用句などについても調査が行われた。結果は平成18年7月26日付けで、ホームページにおいて公表されている。
- 2) 「日本人の漢字能力を、客観的な指標で把握する、初めての試み」として、2005年4月～5月に行われた「漢字能力調査」において、大学新1年生は「6割が常用漢字を習得できていない」との結果が、2005年8月に財団法人日本漢字能力検定協会より報告されている。

また、2006年7月15日付けで発表された国立教育政策研究所の「特定課題に関する調査」においても、「日常生活や学習場面での使用頻度が高い漢字は定着している。一方、使用頻度が低いものや使用範囲が狭いものは定着が充分ではない。」との概要が出されている。

- 3) 「リメディアル教育に関する研究・開発及び普及を促進し、その啓蒙や発展に貢献することを目的」に2005年3月に設立された学会。
- 4) 財団法人日本漢字能力検定協会の平成17年度の研究助成を受け、中島・山森が「保育者養成校としての漢字教育の取り組み」(『漢字教育研究』第7号p3～13)に、『保育所保育指針』、『幼稚園教育要領』に基づいた漢字習得の実践報告をまとめた。
- 5) アンケートは以下の内容で行っている。選択肢が不適切なもの(「とても」と「かなり」の区別が曖昧など)もあり、十分なデータを取ることはできないが、おおよその傾向を把握することができる。

①語句の読みは授業理解に効果がありましたか。

[1. とてもあった 2. かなりあった 3. どちらともいえない 4. あまりなかった 5. 全くなかった]

② ①で1, 2と答えた人に

医学用語と一般用語の読みのどちらが役立ちましたか。

[1. 医学 2. 一般 3. 両方 4. その語句よる]

③語句の意味は授業理解に効果がありましたか。

[1. とてもあった 2. かなりあった 3. どちらともいえない 4. あまりなかった 5. 全くなかった]

④ ③で1, 2と答えた人に

医学用語と一般用語の読みのどちらが役立ちましたか。

[1. 医学 2. 一般 3. 両方 4. その語句よる]

⑤ ①・③で4, 5と答えた人に

効果がなかったのはなぜですか。()内は回答数

[1. 授業内で先生が説明してくれた (3) 2. 本文を読めば大体分かる (2)
3. なんとなく分かる語が多かった (2) 4. プリントの説明が不十分 (4)]

⑥授業理解に必要なものは何だと思いますか。〔複数回答可〕

1. テキストに振り仮名を付ける
2. テキストに意味や説明を多く載せる
3. 自分で辞書を引く

4. 授業での説明を詳しくする
 5. 自分がやる気を出す
 6. 自分の理解力
 7. 授業をしっかり聞く
 8. その他
- 6) 医学・看護系の学生たちの手助けとなる読み方を調べるための書籍が複数出版されている。『看護医学用語の読み方と意味』（改訂版 2005 医学芸術社）や『医学用語読み方辞典』（2004 ユリシス出版部）など。
- 7) 詳細は中島・山森による「保育者養成校としての漢字教育の取り組み」『漢字教育研究』第7号 p3～13 および、中島・山森「保育者養成校としての漢字教育に関する研究」『北陸学院短期大学紀要 第38号』2006 p 43－59 参照。
- 8) 今回の集計対象には含めていないが、範囲を拡大して石川中央地区の保育所109園に、同様の趣旨及び調査内容によるアンケートを行った。実施期間は2006年8月～9月である。返送のあった園は82園（回収率75.2%）、回答総数785通のうち有効回答数は738通（同67.7%）である。この結果集計と分析に関しては、稿を改めて行う。
- 9) 同上
- 10) 比較対照としたテキストは下記のものである。
- ・本学使用テキスト 『小児保健実習』（保育と保健・看護の視点から）同文書院 2005
 - ・参考テキスト A 『改訂 小児保健』（理論と実習）樹村房 2004
 - B 『幼児教育法 小児保健実習』三晃書房 2004
 - C 『改訂 小児保健実習セミナー』建帛社 2004
 - D 『小児保健実習ガイド』 建帛社 2004

参考文献

プリント作成時に、読みと意味の確認のため、下記を参考にした。

- ・『医学用語読み方辞典』 2004 ユリシス・出版部
- ・『看護医学用語の読み方と意味 改訂版』 2005 医学芸術社
- ・『広辞苑』 岩波書店 第四版
- ・『大辞林』 三省堂 第二版
- ・『日本大百科全書（スーパーニッポニカ）』小学館 1998 第一版
- ・『四訂版 現代家庭医学大事典』 講談社 1999
- ・『家庭医学館』 小学館 1999